

《論文》

コーチ教育プログラムの成果に関する一考察

—コーチのセルフリフレクションに着目して—

黒岩 純, 大平 正軌, 亀山 巖, 西機 真, 上野 裕一

A Study on the Achievement of the Coach Education Program

—Focusing on Self-reflection of Coach—

Jun KUROIWA, Seiki OHIRA, Iwao KAMEYAMA, Makoto NISHIKI, Yuichi UENO

キーワード：コーチ教育, 質的分析, 成人教育, 自己主導型学習

Keywords: Coach Education, Qualitative Analysis, Andragogy, Self-directed learning

要旨

本研究は、コーチ教育プログラムの成果について知見を得るため、JRFUで実施したコーチングコースを対象に調査を行なった。L2で実施する、トランスクリプト内のコーチのセルフリフレクションとして自由記述された内容について、内容分析を用いて質的分析を試みた。受講者（コーチ）は、L2での学びについて「学びの転換の可能性」「自身のコーチングに対する内省」「コーチングポイントの再認識」「ラグビーとコーチングに関する知識獲得」「講習会の意義とスタイルの効果」「他コーチとの関わりからの学び」と捉えていた。L2の教育プログラムとスタイルが、成人教育学で提起されている自己主導型学習として機能しており、プログラムの成果として捉えられたカテゴリーは、「おとなの学び」としての特徴を有すると同時にL2の価値として理解できることが示唆された。

はじめに

本研究は、JRFU（日本ラグビーフットボール協会）が行うコーチ教育としてのコーチ資格講習会の成果について評価を試みるものである。これまでコーチ資格取得講習会（コーチングコース）において、講習会終了時に、受講者で

あるコーチが資格授与にふさわしい知識と能力を身につけたか、講習会において講師となるエデュケーターがそれにふさわしい能力を持って教授したのかという評価は行われてきた。しかしながら、講習会のプログラム内容を含め、エデュケーターによる学習スタイル、コーチがコーチング能力を身につける以外に講習会を通

じてどのような成果を得られたかなど講習会全体の評価については、これまでJRFUでは行われてこなかった。講習会を運営する立場として、それらをチェック、評価することは重要であると考えられるが、その方法論、他所での状況については明確になっていない。ここでは、コーチのセルフリフレクションからコーチが講習会をどのように捉えたのかという観点より、教育プログラムについて一つの評価を試みる。

JRFUのコーチ教育（指導者養成）

World Rugby (WR) はラグビーフットボール競技における国際的統括機関である。現在、WRは加盟国に対してラグビー競技に関する様々な教育プログラムを提供している（図1）。日本では、2004年にJRFUがWRと連携しながら指導者養成事業を始めてから12年が経過する。その間いくつもの改訂があり、2011年から現在のシステムとなってコーチングコースが実施されている。JRFUでは、「新スタートコーチ・育成コーチ・強化コーチ・トップチームコーチ」と4つのコーチ資格を指導者に対して付与している¹⁾。それらのうちラグビーの

コアバリュー、技術・戦術指導やコーチングスキルに関わる部分については、世界標準の知識と技能をコーチに身につけてもらうため、WRが提供するコーチングのための教育プログラムを講習会に組み入れている。プログラムはコーチングコースレベル1・2・3から構成されている。WRの「Coach Education」にはそれぞれのテーマとして、レベル1「Introducing Rugby」、レベル2「Developing Skills」、レベル3「Analysis and Preparation for Coaches」と示されている²⁾。山本（2007）は、WRが提供するコーチングコースの特徴として、課題達成型学習（Outcome based Learning）と実践能力評価型学習（Competency based Learning）をあげ、「それらを達成するために、受講者を中心に据え、より多く質問を投げかけコーチの考えを聞くこと、ワークショップや指導実践の場を多く提供すること」と示している³⁾。

WRコーチングレベル2コース

本研究で対象とするWRコーチングレベル2コース（L2）について概説する。L2では、「What to coach」と同様に「How to coach」について

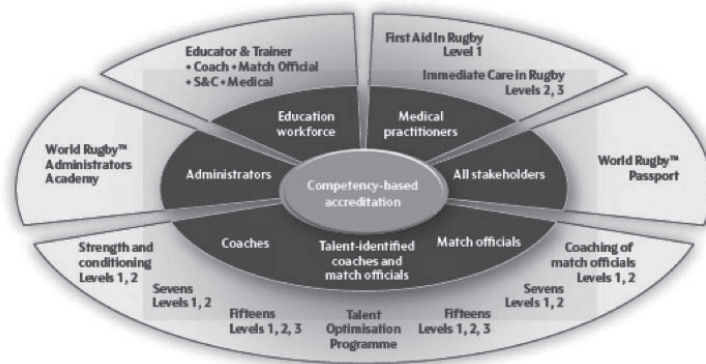


図1 World Rugby Training and Education courses

も理解・実践できるコーチを育成することを成果目標としている。そのため、ラグビーの「攻防の原則」「キーファクター分析」「機能役割分析」をツールとして使い、スキル向上のための練習策定ができ、また効果的にコーチングできるようになることが行動目標である。よって、L2ではレクチャー形式、グループワーク形式、実践形式など様々な学習スタイルが用いられるとともに、コーチが対エドゥケーター、他コーチと高度にインタラクティブに関わることが求められている。またコーチが自らのコーチングスキルを高めるために指導実践する機会が多く

確保され、そこにエドゥケーターと他コーチからのフィードバックが行われることがコースの基盤となる。コース期間中の進歩状況がコンピテンスとして記録され継続的な評価が行われる。

L2に係る期間は、「Face-to-face: 5 x 3 hour modules = 15 hours, Pre-course and homework: 5 hours (approximately), Six game diary (minimum) including sessions and reparation: 30 hours (approximately), Assessment: 2 hours, Total course duration: 52 hours」とマニュアルに記載してある⁴⁾。具体的な内容については図2に示す。

MODULE	CONTENTS
Pre-course	<ul style="list-style-type: none"> • Undertake Rugby Ready & Laws of the Game online • Assess own strengths, weaknesses and goals • Prepare a coaching session
Module 1	<ul style="list-style-type: none"> • Introduction, identify needs and explain assessment protocols • Delivery of pre-prepared coaching session • Educator demonstration of range of styles • Coaching process - 'How' to coach • Self-reflection and benchmarking
Home study	<ul style="list-style-type: none"> • LTPD
Module 2	<ul style="list-style-type: none"> • Rugby's core values • Role of the coach • Developing a personal philosophy, including LTPD discussion • Applying the principles of attack and defence - video • Team strengths and weaknesses • Planning guidelines
Home study	<ul style="list-style-type: none"> • Plan a practice based on video work
Module 3	<ul style="list-style-type: none"> • Plan a practice in groups • Deliver a session • Review
Home study	<ul style="list-style-type: none"> • Identify the key factors for a specific skill
Module 4	<ul style="list-style-type: none"> • Key factor analysis introduction and video work across two ranges of skills: <ul style="list-style-type: none"> - Pass, run, throw, jump, evasion - Individual scrum shape, tackle, ball into contact, lineout lift, etc • Player welfare • Planning and practice • Educator demonstration
Module 5	<ul style="list-style-type: none"> • Functional role analysis introduction • Ruck and maul • Selection • Contemporary Law issues • Where to get further information: fitness, nutrition, Sevens, coaching.worldrugby.org, additional sites, etc • Diary and assessment guidelines

図2 WR Coaching Level2の内容

資格認定の条件として、同様にマニュアルに以下のように示してある⁴⁾。

- ・ Complete the on-line self-check tests at rugbyready.worldrugby.org and laws.worldrugby.org
- ・ Attend and participate in all modules of the course
- ・ Complete all homework tasks
- ・ Be observed coaching in the coach's own environment
- ・ Satisfactorily complete a diary for a team that is being coached in the current or next Rugby season. The diary should cover a cycle of six games and the training sessions within that cycle. The diary should provide evidence of a coach's ability to apply the 'Plan, Do, Review' model.

The coach's progress during the course will be tracked on the Level 2 Transcript for Accreditation. This serves as the ongoing assessment tool.

「The Level 2 Transcript for Accreditation」(トランスクリプト)には、レベル2コーチに必要とされるコンピテンスが列記されている。コンピテンスは、「A PLANNING」「B COACHING PROCESS (including style)」「C RUGBY KNOWLEDGE AND SKILLS」「D PLAYER WELFARE」「E PHILOSOPHY AND ETHICAL BEHAVIOUR」の5尺度32項目が設定されている。それぞれのコンピテンスは、「EXCELLENT (E)」「COMPITENT (C)」「NOT YET COMPITENT (NYC)」の3段階で評価される。これに加え、自由記述として「Progress after Level 2 course (to be completed by Educator)」「Coach self-

reflection on the course」(コーチのセルフリフレクション)を記録し、これらを参考にしながら、1対1の面談を通して、総合的にレベル2コーチとしての能力が評価される。

エデュケーター

コーチングコースでは、エデュケーターが講師を務める。エデュケーターとは、WRが提供する30時間のエデュケーター養成プログラムを修了し、WRコーチングコースを展開する能力を身につけた者である²⁾。プログラムの内容は、WRのコーチ教育組織の理解、エデュケーターの役割、受講対象者の特性への対応、学習と評価、学習の振り返り、ファシリテーションスキル、コーチングコースのプログラム内容の理解、リスクマネジメント等から構成されている²⁾。

エデュケーターは、コーチングコース受講者の学びを促進する役割を持つ。つまり、「知識の獲得」に重点をおいたレクチャー型のみではなく、双方向型(エデュケーターとコーチ、コーチとコーチ)の学習を意図して、ワークショップや指導実践を多用した講習を計画し、実施する。図2に示した内容に対して、指導実践、グループワークとフィードバック、ディスカッションなどインタラクティブな講習会を展開する。

コーチ教育プログラムの成果と評価の現状

以上のように、コーチ(受講者)の学びが促進されるようコーチングコースは設計されているが、果たしてその成果はどのように評価されるのであろうか。例えば、授業評価において、その機能を評価するのであれば、診断的評

価、形成的評価、総括評価などが実施されるであろう⁵⁾。JRFUでは、講習会終了後、エドゥケーターが集まって、省察を用い講習会の運営について振り返り、次回以降の講習会の質を高めていくことは行ってきた。しかしながら、主要なエドゥケーターのみが集まって為されるその手法はインフォーマルと言わざるを得ないであろう。またその結果得られた気づきについても、エドゥケーター側からの視点に止まってしまふという課題が残る。

Christophe (2010) らは著書中の「Evaluation of formal coach education」の項において、「コーチの教育プログラムを直接調査し、評価しようとする試みがほとんど見られない」と指摘している。その結果、「多くのコースがコンピテンスに基づいて実施されているにもかかわらず、コーチ教育の結果として得られたコーチング能力かどうかのエビデンスは残っていない」とし、つまり獲得された能力はプログラムの結果かどうかは不明確であると述べている⁶⁾。

一方、数は少ないながらコーチ教育の成果について評価を試みた報告もみられる。Cassidy (2006) らは、開催したコーチ教育プログラム (Theory-based coach education program) において、コーチ教育プログラムの評価について、参加したコーチらに半構造的インタビューを行い、分析を行った結果「学習者としてアスリートの事を捉える」「コーチングのプロセスにフォーカスする」「他のコーチと話すことの価値」の3つを成果として導き出した⁷⁾。また井村ら (1999) は、サッカーのS級コーチ養成プログラムにおいて、自然環境を活用したASE (社会性を育成する実際体験) が参加者に及ぼす心理的・生理的影響について、成果を実証的に検証する事を試みた。「プログラム実施前後

の班の雰囲気」についてSD法を、「班内における自己の集団技能」および「自己の新しい面への気づき (体力、コミュニケーション、リーダーシップ等)」について6件法を用いて、参加者に評定させた。ASEプログラムについて「体力的にもきついが、楽しみながら効果的に仲間づくりが行える活動として高く評価しており、自己の新しい面 (体力、コミュニケーション、リーダーシップ等) を再認識する機会が得られた」と評価したと報告している⁸⁾。

いずれも学習者検証の法則に立ち、受講者に対して質的分析の手法を用い、実施された講習会に対する成果について検証を行っている。実際に、講習会の成果に対する評価は、講習会実施のPDCAサイクルの一環として、経験的に行われていることは想像に難くない。しかしながら、JRFUではエドゥケーターもしくはエドゥケーターグループの内的な知見の積み重ねに止まっているという課題があり、これらの評価意見が広く共有されることが、今後のコーチ教育の発展に寄与するものと考えられる。

目的

そこで、本研究ではコーチ教育プログラムの成果について知見を積み重ねる事を狙いとして、筆者らが実施したL2において受講者が捉えたコーチのセルフリフレクションについて調査・検討し、JRFUにおけるコーチ教育の成果を明らかにすることを目的とした。

方法

現在まで、日本国内で実施されたL2に参加した受講生 (コーチ) を対象として、コーチ教

育の成果を把握するため、講習会終了時に記録された「コーチのセルフリフレクション」に対して、質的分析を試みた。

対象者：

2012年3月～2016年3月に、日本国内で開催されたL2を受講した165名とした。今回は、特にコーチの属性（年齢、性別、競技歴、指導歴、指導環境等）については取り扱わないこととした。

分析方法：

受講者がトランスクリプト内のコーチのセルフリフレクションに自由記述したテキストデータに対して、内容分析（Content Analysis）を用いて質的データ分析を行った。

内容分析はテキストのある特定の属性を客観的・体系的に同定し、推論を行うための方法である。寺下（2011）は、内容分析はアンケートの自由記述や日記文などのすでに記述されたテキストの分析に適用でき、テキストの中で何が語られているのかを知るために利用できるとしている⁹⁾。

以下に内容分析の手順を示す¹⁰⁾。

第1段階	リサーチクエスション（研究の問い）の決定
第2段階	質問への回答のデータ化 回答のなかから不要な部分を削除し、素データを作成する
第3段階	基礎分析 大量のデータをできる限り単純化する
第4段階	本分析 類似した意味内容の要素を探し、それらを適確に表す表現へと置き換える
第5段階	カテゴリの信頼性の確認 形成されたカテゴリの信頼性を確認する

寺下（2011）が作成したものを引用

図3 内容分析（Content Analysis）における分析手順

本研究でも同様の手順により分析を行った。ただし、第1段階の「リサーチクエスションの決定」については、より多くのデータを確保するため、現行のプログラムとなった2012年以降トランスクリプトとして蓄積された資料から、コーチのセルフリフレクションの部分を抽出し、分析対象とした。受講者が、講習会終了時に自由記述したテキストデータから、不要な部分を削除し、一つの意味をなす文（意味単位）に分け、できる限り単純化した。類似したものを集め、それらを適確に表す表現へ置き換えて、カテゴリー化した。形成されたカテゴリーの信頼性を確保するために、トライアングレーションのプロセスとして複数の研究者でカテゴリーの妥当性について議論した。

倫理的配慮

トランスクリプトは、日本ラグビーフットボール協会競技力向上委員会で保管されている。本研究における資料としての使用について、研究の趣旨、個人情報保護に配慮する由を説明した上で、コーチ資格講習会を管轄する競技力向上委員会の長及びコーチ講習会統括責任者にデータ使用の同意を得た。データ利用は本研究での使用に限定し、また厳重に保管している。

結果

コーチのセルフリフレクションに対し、内容分析の手順により、集めた全てのテキストデータを意味単位に分け、単純化し、類似したものを集めカテゴリー化した。その結果、525の意味単位が得られ、6つのカテゴリーとその他に分類した（表1）。

表1 コーチングコースに対するコーチのセルフリフレクション

カテゴリー	意味単位数	
	(個)	(%)
学びの転換の可能性	122	23.2
自身のコーチングに対する内省	111	21.1
コーチングポイントの再認識	102	19.4
ラグビーとコーチングに関する知識獲得	84	16.0
講習会の意義とスタイルの効果	61	11.6
他コーチとの関わりからの学び	37	7.0
その他	8	1.5
	525	100.0

以下に、カテゴリーに『 』を、そこに含まれるテキストデータに「 」を用いて示し、コーチングコースに対するコーチのセルフリフレクションについて説明する。

最も多くの意味単位が得られたのは『学びの転換の可能性』（122個）であった。このカテゴリーには「学んだことを意識し、日々のコーチングに取り組み、コーチングの技術向上をしていきたい」「今後もっと知識を増やし、正確な情報、選手への指導、チーム分析などなど、自ら向上していきたいと考える」や「正しい知識を得る事ができたので、自身のコーチングに活かす事ができるように取り組んでいきたい」などの振り返りが含まれ、コーチングコースで学んだことを自分自身のフィールドに戻って日常のコーチングに活かすこと、引き続き学び続ける決意をする機会になったと考えている者が多くいることがわかった。

次に多かったのが『自身のコーチングに対する内省』（111個）で、「普段の自分がどれだけたくさんの情報を選手に与えすぎていたのかということを実感した」「これまではティーチング中心で、選手に自ら考え成長させる指導をしてこなかったことに気づいた」「キーファクターやフィードバック、プレーヤーへの確認など不十分なものが多くあり、反省した」など、

コーチングコースで学んだことと普段のコーチングを対比させて考える機会となり、ラグビー競技の知識に関するよりは自分自身のコーチングスキルに対する振り返りが多くみられた。

次は『コーチングポイントの再認識』（102個）である。「ラグビーの原則やプレーへの適用は、指導する際の練習内容を検討する上で、指針となる事柄であり、そのことを確認することができてよかった」「キーファクターをしっかりと設定していくことで、プレーヤーが分かりやすい練習を考えられた」「プレーの楽しさ、活気を意識した練習（ドリル）により、選手同士のコミュニケーションを引き出したのは良い点だった」「普段やっているコーチ活動が言語化され、構造化された中で、どの部分の活動なのか認識できた」など、競技に関する専門的知識の適用方法やコーチングスキルについても重要なポイントを再認識できたと考えられた。

『ラグビーとコーチングに関する知識獲得』（84個）は上記に続く意味単位が得られたカテゴリーである。「ラグビーの原則を学ぶことによって、ラグビーの構造的な理解が深まったと考える」「ラグビーの構造の理解、そこからのコーチングのプラン、レビューの大切さを学んだ」「練習における分析から、それを元に練習をプランニングしていくことや、その練習で

プレーヤーに何を教えたいか、どんなスキルを身につけさせたいかなど、そのポイントを伝える手法を学ぶことができた」など、ラグビーを競技構造としてプレーの原則で理解し現状把握の客観性を持つこと、そこから練習計画を策定し、効果的なコーチングスキルでプレーヤーに落とし込むことの手法を知識として学んだということが確認できた。

『講習会の意義とスタイルの効果』（61個）では、まず「コーチにとって勉強する機会はありませんので大切である」「普段、意識したこともないような事が多く、非常に役立つ研修であった」と学ぶ機会の重要さと自身にとって役立つ機会であったという振り返りから、「座学、実技が織り交ぜられて、とても勉強になった」「講習会は目的が明確で、しっかり立案され、プログラムされている」「自分自身のコーチングについて、客観的なフィードバックを頂くことができ、今後のレベルアップにつなげたい」と実技実践やそれに関するフィードバックなどインタラクティブな関わりを企図していることを評価する振り返りがみられた。反面、このような講義スタイルに慣れないためか「実技に限ってはイメージが全く湧かなかった」「講習時間が長いので集中力に欠けた」「受講前は、正直に練習の方法論をたくさん学べると思っていた」などネガティブな振り返りも少ないがみられた。

最後に『他コーチとの関わりからの学び』（37個）では、「他のコーチのコーチング、考え方、やり方を見て多く学んだ」「他のコーチの方々と情報交換ができ勉強になった」「たくさんの方からアドバイスをいただき、短い期間だったが成長することができた実感している」など、エドゥケーターからだけの学びでは

なく、講習会の中での他コーチとの関わりから多くの事を学んでいると振り返りをしていることがわかった。

考察

本研究では、L2におけるコーチのセルフリフレクションに記されたテキストデータが、調査しようとするコーチ教育の成果という現象を伝達するものと捉え分析を進めた。

今回得られたカテゴリーから、L2を受講したコーチは、コーチングコースのセルフリフレクションとして、意味単位の多い順から、『学びの転換の可能性』『自身のコーチングに対する内省』『コーチングポイントの再認識』『ラグビーとコーチングに関する知識獲得』『講習会の意義とスタイルの効果』『他コーチとの関わりからの学び』と捉えていた。特徴的な点として、資格取得のための講習会という意図からの知識獲得に止まらず、より現実的にコーチ自らが活躍するコーチング現場と結びつけて、コーチングコースでの学びとして捉えているのではないかということが示唆された。これらについて成人教育学という観点から考察してみたい。

成人教育学 (Studies in Adult Education) は、従来子どもの教育を暗黙の前提に成立してきた教育原理をおとに適用してうまくいかなかった例やそこで生じた実践的な問題意識から、おとなの学びや教育を考える領域として生み出された。ペタゴジー (Pedagogy) (教育学, 教授学) と対比して、アンドラゴジー (Andragogy) (成人の学習を援助する技術と科学) としても知られている¹¹⁾。

成人教育学では望ましい学習スタイルとして「自己主導型学習」を提起している。渡邊

(2007) は「学習する側は自らが学ぶ主体として学習に取り組むのに対し、おしえる側は学習援助・学習支援の専門性を発揮する主体として、学習の実現に向けて取り組んでいくことになる。それゆえ、どちらが主でどちらが従かという二者択一の関係ではなく、両方が主体となり、お互いに同じ目標に向かって、対等で異なる立場から共同作業していくという考え方」と説明している¹¹⁾。L2でいえば、コーチ（学ぶ側）とエドゥケーター（おしえる側）という関係に例えることができる。エドゥケーターの役割は、コーチの学びを促進させることであるが、エドゥケーターは自己主導型学習の担い手として両者が主体となり協働しながら学習のゴールに向けて取り組む姿勢は必須となるであろう。同時に、エドゥケーターの持つべき指導哲学や役割として、常に意識しておく必要がある。ここでは、コーチとエドゥケーターには上記のような関係性が成立していたと仮定して論をすすめる。

成人教育学の学びの5つの特徴として、「学習者の自己概念」として他者依存的なパーソナリティーから自己主導型のパーソナリティーへの移行していくこと、「学習者の経験の位置づけ」として学習者の経験が学習のための豊富なリソースとして活用できること、「学習へのレディネス」として学習者の生活の課題や諸問題への取り組みに応じて生じてくるものと捉え学習と関連のある問題関心や活動経験、学習を維持していくための基盤となる達成欲求などがレディネスとして機能すること、「学習の志向性」として学習者の目指す到達目標や当面する課題、具体的な学習ニーズや学習実態に即した問題解決中心の学習になる傾向があり即効性のある学習が望まれること、「学習への動機付

け」として内的な刺激や好奇心によって動機付けを得ると同時に学習の意味や位置付けが明確化する傾向があると説明している¹²⁾。

L2では、レクチャー形式、グループワーク形式、実践形式など様々な学習スタイルを用いる課題・問題解決型のプログラムであることが「学習の志向性」としてコーチのニーズを満たしていると考えられると同時に、コーチが対エドゥケーター、他コーチと高度にインタラクティブに関わることを求めることで、「学習者の自己概念」を自己主導型へと促しているといえる。このことは『他コーチとの関わりからの学び』、おとなの学びの重要性や学ぶことの楽しさを再認識し、学習スタイルがそのような効果を導いたとして『講習会の意義とスタイルの効果』とコーチは捉えたと推測できる。「学習者の経験」は学習のリソースとして指導実践で表現され、ディスカッション等のエビデンスとして効果的に活用されたであろう。「学習のレディネス」としても、自身の日常のコーチングの課題や問題に対し、L2での学びを常に対比させながら学ぶことで『自身のコーチングに対する内省』『コーチングポイントの再認識』として学びの成果と捉えるのであろう。それらの相乗効果として、「学習への動機付け」として内的な刺激や好奇心が高まり、『学びの転換の可能性』としてコーチのフィールドに戻っても継続して学び続けると明確に宣言することや、L2で学んだことを現場に活かし、また常にコーチとして向上していこうと講習会での学びを振り返って捉えるのだと考えられる。もちろんコーチを満足させる課題解決のツールとして、ラグビーの「攻防の原則」「キーファクター分析」「機能役割分析」などが適切に紹介され、上記のおとなの学びのスタイルを通じて

相乗的に活用されることが『ラグビーとコーチングに関する知識獲得』として成果と捉えたと考えられる。

つまり、L2の教育プログラムとエドューケーターによる学習スタイルが、成人教育学の自己主導型学習として機能している可能性があると考えることができ、コーチのセルフリフレクションとして捉えられたカテゴリーが「おとなの学び」の特徴として説明できるのと同時にL2の価値として理解できることが示唆された。

まとめ

JRFUにおけるコーチ教育の成果を明らかにすることを目的に、L2後のコーチのセルフリフレクションに自由記述されたテキストデータについて内容分析を行なった結果、『学びの転換の可能性』『自身のコーチングに対する内省』『コーチングポイントの再認識』『ラグビーとコーチングに関する知識獲得』『講習会の意義とスタイルの効果』『他コーチとの関わりからの学び』というカテゴリーが得られた。L2の教育プログラム・スタイルは成人教育学の自己主導型学習として機能している可能性があり、得られたカテゴリーは「おとなの学び」としての特徴を有すると同時にL2の価値として理解

できることが示唆された。

引用文献

- 1) 日本ラグビーフットボール協会：コーチネット
<http://jrfu-coach.net> (2016年12月1日)
- 2) World Rugby: Education & Training-Coaching-WR Coach Education
<http://coaching.worldrugby.org/?page=160> (2016年12月1日)
- 3) 山本巧, 黒岩純, 上野裕一：IRBコーチ教育制度. ラグビー科学研究, Vol.19 (No.2) : 18-22, 2007
- 4) World Rugby Training & Education: Level 2 Coaching Fifteens Rugby Course Manual. World Rugby, 2011
- 5) 富士原紀絵：教育の立場からみた教育評価. 日健教誌, 22 (3) : 249-253, 2014
- 6) Christopher Cushion, Lee Nelson, Kathy Armour, et al.: Coach Learning & Development: A Review of Literature. Sports Coach UK, January 2010
- 7) Tania Cassidy, Paul Potrac, Alex Mckenzie: Evaluating and Reflecting Upon a Coach Education Initiative: The CoDel of Rugby. The Sport Psychologist, 20:145-161, 2006
- 8) 井村仁, 飯田稔, 田嶋幸三, ほか：JFA・S級養成コースにおけるASE活用に関する基礎的研究. 野外教育研究, 2 (2) : 37-42, 1999
- 9) 寺下貫美：第7回質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために. 日本放射線技術学会雑誌, 67 (4) : 413-417, 2011
- 10) 舟島なをみ：質的研究への挑戦 第2版. 医学書院：東京, 2007
- 11) 渡邊洋子：成人教育学の基本原則と提起 - 職業人教育への示唆 -. 医学教育, 38 (3) : 151-160, 2007
- 12) マルカム・ノールズ, 渡邊洋子監訳：学習者と教育者のための自己主導型学習ガイドーともに創る学習のすすめー. 明石書店：東京, 2005